

古都鎌倉の観光資源「段葛」の 成立時期とその後の展開

西山 孝樹¹・天野 光一²

¹正会員 日本大学助手 理工学部まちづくり工学科（〒101-8308 東京都千代田区神田駿河台1-8-14）

E-mail: nishiyama.takaki@nihon-u.ac.jp

²フェロー会員 日本大学教授 理工学部まちづくり工学科（〒101-8308 東京都千代田区神田駿河台1-8-14）

E-mail: amano.kouichi@nihon-u.ac.jp

神奈川県鎌倉市の若宮大路は、鶴岡八幡宮が治承4（1180）年に造営された2年後の養和2（1182）年から整備され、現在では古都鎌倉の観光資源の一つとして欠かせない存在となっている。その中央部には、周囲より一段高い「段葛」と呼ばれる参道が整備されている。その「段葛」は、平成26（2014）年から平成28（2016）年にかけて、「史跡鶴岡八幡宮境内整備事業・段葛整備工事」が実施された。

本稿では、先の整備工事について、種々の事後評価を行うための基礎情報を一次史料および既往研究から得ることを目的とした。その結果、「段葛」の成立時期や先の名称が使われ始めた時期は、未だに明確になっていないことがわかった。そこで筆者らが、これまで明らかにしてきた平安時代から鎌倉時代における社会基盤整備に関する知見を加えることで、「段葛」の実態に迫っていくことができることを示した。

Key Words : Dankazura, Tsurugaoka Hachimangu, the Kamakura Period, Tourism Resources

1. はじめに

神奈川県鎌倉市の鶴岡八幡宮から由比ヶ浜へと伸びる若宮大路は、長谷の大仏（鎌倉大仏）等と並び、古都鎌倉には欠かせない観光資源の一つに数えられる。

若宮大路の中央部には、「段葛」と呼ばれる周囲より一段高い参道が敷かれている。「段葛」と呼ばれるようになった経緯について、白井永二によれば¹⁾、

「置路として全体に一段高い道の両側に、かつら石を壇にたたんだ道を、だんかつら-段葛-と云う呼び方が古くからあったと考えられる。」

と示され、一「段」高い位置に「葛」石を置いて整備したことから、「段葛」になったという。

春には、左右に植えられた桜やツツジが咲き誇り、夏には「ぼんぼり祭り」が開催され、一年を通して大勢の参拝客や観光客で賑わう。

しかしながら、「段葛」に植えられた桜の老朽化、その桜の根が張り出すことによって石積みが押し出され、積まれた石が崩壊する危険性が指摘されるようになった。

そこで、平成26（2014）年11月1日から平成28（2016）年3月にかけて「史跡鶴岡八幡宮境内整備事業・段葛整備工事」が実施されることとなった。修復・再整備によって、歴史的構造物である「段葛」を保存しつつ、鎌倉

の観光まちづくりへどのように活かしていくかを考えていかなければならない。

そこで本研究では、一昨年から実施されている整備工事について述べていく前段として、「段葛」を歴史的な側面から、その成立について整理し、基礎情報を得ることを目的とした。

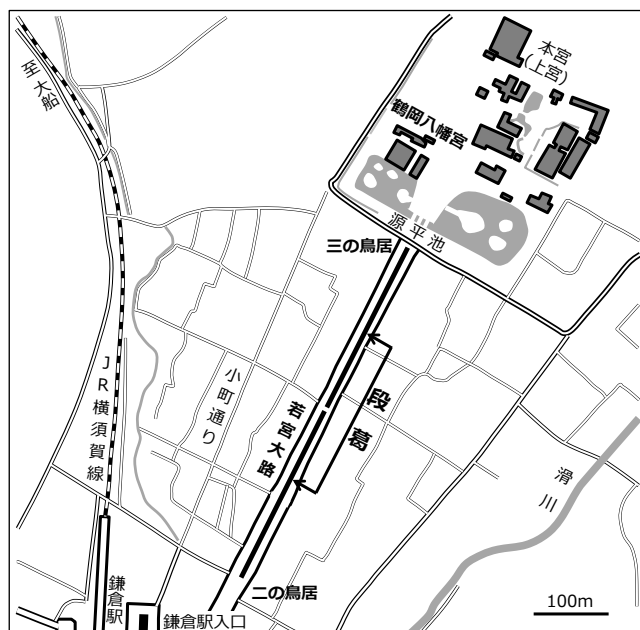


図-1 段葛 位置図（作成：西山）

2. 研究方法

既往研究についてまとめておくと、「段葛」のある若宮大路に関しては、『鎌倉市史 総説編』²⁾や馬淵和雄「若宮大路-都市の基盤を掘る-」³⁾などが挙げられる。

本研究で対象とする「段葛」については、白井永二「段葛考」⁴⁾や松尾宣方「段葛-大路の上のつくり道」⁵⁾がある。その他には、『日本歴史地名大系第14巻 神奈川県』の「若宮大路・段葛」⁶⁾の項が詳しい。

鎌倉市教育委員会発行の『史跡鶴岡八幡宮境内保存管理計画書』、『史跡若宮大路保存管理計画策定報告書』の計画書⁷⁾・報告書⁸⁾には、若宮大路に関する通史や絵図等がまとめられている。

3. 「段葛」の歴史的背景

「段葛」が整備されている若宮大路について、一次史料と発掘調査の状況から、中世においては幅員約11.2丈（約33.6m）であったことが指摘されている。さらに、『日本歴史地名大系第14巻 神奈川県』⁹⁾には、「当時は両側を土手に囲まれて、道路は現在よりも広く、5.60m〔ママ〕はあったこと、中央の今の段葛にあたる部分が参道で、周囲は空地であったこと」とあり、若宮大路は現在よりも2倍以上の幅員であったと考えられている。しかしながら、いつの段階で現在の幅員になっていったかは不明である。

(1) 『吾妻鏡』にみられる道路に関する記述

鎌倉幕府により編纂された歴史書である『吾妻鏡』は、治承4（1180）年から文永3（1266）年までの87年間の事績がまとめられている。筆者らは、先の文献で土木事業（築城や柵の設置といった軍事的なものを含む）が50ヶ所に掲載されていたことを明らかにしてきた¹⁰⁾。そのうち、「道路」に関する記述は、表-1に示した12ヶ所にみられた。養和2（1182）年3月15日の記述をみると、

「鶴岳の社頭より由比の浦に至るまで、曲横を直して詣往の道を作る。」

とあり、この記述が若宮大路に関する初出とされる。

「段葛」と呼ばれるようになる中央部の参道は、これ以降に築造されたと考えられる。

(2) 「段葛」の成立時期

次項で詳述するが、「段葛」に関する初出の史料は、明応4（1495）年の『鎌倉大日記』¹¹⁾であるとみられる。「八月十五日大地震洪水鎌倉由比濱海水到千度敷水勢大佛殿破堂舎屋溺死人二百餘」

表-2にも示したが、その訳を示すと¹²⁾、

「大地震・洪水のため鎌倉由比浜に津波あり、千度壇及び大仏殿堂舎破損し、二百余人溺死すると伝う。」

とある。地震による津波で、「千度壇（「段葛」を指すカ）」が破損したという。このように、若宮大路が整備された養和2（1182）年から、明応4（1495）年までの約300余年の間には「段葛」に関する記述はみられない。

既往研究で示されている「段葛」の成立時期に目を向けると、『日本歴史地名大系第14巻 神奈川県』¹³⁾には、

「段葛は、近年になって堤を石組みにして整えられた結果、かつての姿とは変わってきた。また今は二ノ鳥居まで全長480m余であり、段葛の部分は八幡宮境内地となっている。古くは二ノ鳥居からさらに南、浜の鳥居まで続いていたが、明治11（1878）年にその部分を失ったという。明応年間（1492～1501）頃の善法寺寺地図（津久井郡光明寺蔵）によれば、当時の置石が少なくとも下の下馬まで続いていた状況が明らかである。」

明確な成立時期については言及していないが、14世紀後半から15世紀前半頃の明応年間（1492～1501）には、「段葛」が存在していたとする。

一方、松尾宣方は『よみがえる中世3-武士の都鎌倉』「段葛-大路の上のつくり道」¹⁴⁾のなかで、「段葛築造工事は河川あるいは湿地であった場所に土石

表-1 『吾妻鏡』に記載された「道路」に関する記述一覧¹⁵⁾

和暦	西暦	月日	No.	事 項
養和 2	1182	3月15日	1	・鶴岳の社頭より由比の浦に至るまで、曲横を直して詣往の道を作る。
文治 4	1188	5月20日	2	・今日（佐々木）定綱に仰せ遣はさる。この上、鎌倉中の道路を作るべきの旨、
文治 5	1189	9月17日	3	・また寺院の中央に多寶寺あり。釈迦多寶像を左右に安置す。その中間に關路を開き、旅人往還の道となす。
建久 5	1194	4月10日	4	・鎌倉中の道路を造らる。梶原景時これを奉行す。
建仁 4	1204	3月 9日	5	・經俊無勢によつて逃亡するの間、凶徒等二ヶ國を虜領し、鈴鹿の關・八峯山等の道路を固む。
貞永 元	1232	11月 3日	6	・五大尊堂、その地を引き始めらる。また道路を造らると云々。
仁治 元	1240	10月10日	7	・前武州（泰時）の御亭において、山内に道路を造らるべきの由、
		10月19日	8	・また前武州の御沙汰として、山内に道路を造らる。
		11月30日	9	・天晴る。鎌倉と六浦の津との中間に、始めて道路を當てらるべきの由議定あり。
仁治2	1241	4月 5日	10	・曇る。六浦の道を造り始めらる。（中略）新路を始めらるること大犯土たるの間、
			11	・六浦の路造りの事、この間すこぶる懈緩す。
建長2	1250	6月 3日	12	・山内ならびに六浦等の道路の事、先年たやすく鎌倉に融通せしめんがために、陰阻を直さるといへども、當時また土石その間巷を埋むと云々。

表-2 『鶴岡八幡宮年表』にみられる「段葛」に関する記述一覧（その1）¹⁶

和暦	西暦	月日	事業内容	事 項	備 考
養和 2	1182	3月15日	若宮大路	源頼朝、北条政子懷妊による祈願のため、社頭より由比浦までの参道を造る	『吾妻鏡』
南朝：元中5 北朝：嘉慶2	1388	6月	大鳥居	この月、関東管領上杉道合（憲方）、鶴岡八幡宮の浜の大鳥居を再建す	『喜連川半鑑・鎌倉大日記』
明応 4	1495	8月15日	段葛	大地震・洪水のため鎌倉由比浜に津波あり、千度壇及び大仏殿堂舎破損し、二百余人溺死すると伝う、	『鎌倉大日記』
天文 3	1534	6月19日	若宮大路	道春、鶴岡八幡宮七度行路及び下馬橋ニヶ所の修築を発願するにより、この日、相承快元、勧進帳を草す、翌二十日、快元、道春にこれを写う、	『快元僧都記』
天文 4	1535	4月24日	大鳥居	由比浜大鳥居再建本願の玉運、小田原に赴く、次いで北条氏綱の奉加を得、同二十八日、鎌倉に帰る、	『快元僧都記』
		4月晦日	大鳥居	玉運、相承院快元に、由比浜大鳥居再建の勧進帳の起草を求む、よって五月三日、快元、勧進帳を起草す、	『快元僧都記』
		5月 7日	大鳥居	玉運、發起して、由比浜大鳥居の指図を製作せしむ、	『快元僧都記』
		5月27日	大鳥居	玉運（鳥居本願）、由比浜大鳥居再興の資の勧進を開始す、	『快元僧都記』
		6月	大鳥居	この月、由比浜、武蔵国勝沼城主三田政定の指南により、由比浜大鳥居の用木を見立て、また資を勧進す、	『快元僧都記』
		8月10日	大鳥居	玉運（鳥居本願）、由比浜大鳥居用材調達のため、上総国峰上城（真里谷武田信隆の居城）に赴くに決す、	『快元僧都記』
天文 5	1536	4月27日	大鳥居	上総国峰上の由比浜大鳥居用木、洪水により海辺まで数十町引出さる、	『快元僧都記』
		8月27日	大鳥居	由比浜大鳥居用木、船にて由比浜に着く、	『快元僧都記』
		8月晦日	大鳥居	由比浜大鳥居用木、千余人の人力で陸揚げす、	『快元僧都記』
天文 6	1537	6月26日	大鳥居	玉運（鳥居本願）、伊豆国を勧進し、鎌倉に帰る、また、道円、造営用材調達のため、再び安房国に赴かんとす、よって翌二十七日、路銭一結を渡すも、大風により延引す、	『快元僧都記』
		7月16日	大鳥居	相模國小坪浦の由比浜大鳥居用木を、数千人の人力を以て由比浜に引上ぐ、玉運（鳥居本願）、勧孟の儀あり、	『快元僧都記』
		この年	大鳥居	由比浜大鳥居再工のため、二柱の工料として、相模・伊豆両国に棟別銭を課す、	『快元僧都記』
天文 9	1540	1月21日	大鳥居	由比浜大鳥居の新始めを執行す、小田原より京大工数十人、鎌倉に來たり、数日を要して柱二本を彫刻す、	『快元僧都記』
		2月10日	大鳥居	由比浜大鳥居の古根、新木のままにて掘出さる、	『快元僧都記』
天文21	1552	4月 5日	大鳥居	院家中、由比浜大鳥居の竣功を期し、座不冷壇所に於て祈禱を始業し、同十二日まで陀羅尼を修す、	『鶴岡御造営日記』 『新編相模国風土記稿』
		4月12日	大鳥居	由比浜大鳥居の竣功す、執行一箇杓衆院賢恵、二柱を清めんがため、この日、東柱に灑水散枝す、翌十三日、賢恵、西柱を清む	『鶴岡御造営日記』 『新編相模国風土記稿』
		4月26日	大鳥居	由比浜大鳥居の笠木上げを竣行し、見物人群集す、	『鶴岡御造営日記』 『新編相模国風土記稿』
		4月27日	大鳥居	由比浜大鳥居の祝儀を執行す、神主大伴時孝・小別当大庭淳能・社家大工岡崎秀吉参仕し、北条氏康代大道寺周勝、並びに蔭山長門入道・後藤繁能・太田正勝等の奉行衆六人、出仕す	『鶴岡御造営日記』 『新編相模国風土記稿』
寛文7	1667	4月11日	段葛	若宮玉垣の内に於る榎木を伐採するか否か評議あるも、御覽により神慮を窺い伐らざることとす	『鶴岡八幡修復記』
		6月19日	大鳥居	鳥居石材を乗せる舟、備前国犬島を発す、	『鶴岡八幡修復記』
		7月13日	大鳥居	鳥居の石材、相模國小坪浦に到着、翌日、由比浜へ上ぐ、	『鶴岡八幡修復記』
		10月21日	大鳥居	大鳥居（第一の鳥居）の柱石建つ、	『鶴岡八幡修復記』
		11月 4日	大鳥居	大鳥居の笠石を上ぐ、	『鶴岡八幡修復記』
		11月 5日	大鳥居	二の鳥居（段葛中）、三の鳥居（赤松の前）立柱す、	『鶴岡八幡修復記』
		11月16日	大鳥居	三ヶ所の鳥居建て成就す、	『鶴岡八幡修復記』
明治 3	1870	7月	段葛	この月、大鳥居並木敷地新開発のため、社人岩瀬一学・大沢専輔らが坪調べを行う、	『村木家所蔵文書』
明治11	1878	5月	段葛	この月、二ノ鳥居迄の段葛が官有地第三種に編入さる	『大正五年庶務會議綴』
明治21	1888	1月	段葛	この月、横須賀線敷設工事が着手さる（この時段葛の二ノ鳥居以南が取り壊される力）	『鉄道局年報』
明治37	1904	2月 5日	参道	表参道敷石設願が許可される	『指令書綴』
		8月29日	大鳥居	大鳥居（一ノ鳥居）が特別保護建造物に指定される	『内務省告示第五七号』
大正 4	1915	4月24日	大鳥居	二ノ鳥居を修理す、	『庶務回議簿』
大正 6	1917	1月 8日	段葛	段葛敷七段一畝一八歩を境内地に編入の許可あり、	『永久保存書類綴』
		2月17日	段葛	史蹟段葛保存費補助金六五八円の交付通知あり、	『法規指令類綴』
		12月 5日	参道	参道敷石敷設工事竣功し、明治三十七年以来の工事が全て完了す、寄付者に賞状及び木杯を授与す、	『庶務回議簿』
大正 7	1918	3月25日	段葛	段葛修繕工事竣功し、積石を積み直す、	『社務日誌』
昭和元	1926	8月15日	段葛	段葛に春日灯籠四十六基奉建の奉告祭を執行す、	『儀式回議綴』
昭和 2	1927	1月	鳥居	この月、三ノ鳥居を鉄筋コンクリートで再建す、	『神社明細書』
		11月	鳥居	この月、二ノ鳥居を鉄筋コンクリートで再建す、	『神社明細書』
昭和 3	1928	3月25日	段葛	二ノ鳥居付近段葛南入口を整備し、社標石碑を移転す	『當緒に関する綴』
昭和 4	1929	7月 8日	段葛	若宮玉垣工事着手す、	『社務日誌』
		8月26日	段葛	段葛修理工事に着手す、	『社務日誌』
昭和11	1936	3月31日	大鳥居	東京市芝区上田ちた・近田三郎より一ノ鳥居修理費・重修碑建設費の寄付あり、	『国宝一ノ鳥居に関する綴』
		4月 1日	大鳥居	一ノ鳥居修理工事着手す、	『国宝大鳥居修理工事報告書』

表-3 『鶴岡八幡宮年表』にみられる「段葛」に関する記述一覧（その2）¹⁶⁾

和暦	西暦	月日	事業内容	事 項	備 考
昭和12	1937	3月13日	大鳥居	一ノ鳥居改修竣工届を文部省へ提出す,	『国宝一ノ鳥居に関する綴』
		4月 8日	大鳥居	一ノ鳥居重修記念碑の建設敷地修祓式を執行す,	『社務日誌』
		4月13日	大鳥居	一ノ鳥居復興奉告祭・修祓式・重修記念碑除幕式を執行す,	『官私祭書類綴』
昭和28	1953	4月30日	若宮大路	若宮大路改修のため、鎌倉市乱橋材木座一〇一四番ノ九を神奈川県へ売却す,	『基本財産台帳』
昭和29	1954	4月12日	その他	三ノ鳥居内への駐車・乗入れを禁止す,	『庶務回議綴』
昭和32	1957	12月23日	その他	県道拡張のため、鎌倉市雪の下社中一〇七二番地ノ二・一〇五一番ノ四を神奈川県へ譲渡す,	『登記簿謄本』
昭和34	1959	3月24日	その他	県道拡張のため、鎌倉市雪の下社中一〇七二番地ノ四（火除地の一部）を神奈川県へ譲渡す,	『登記簿謄本』
昭和48	1973	9月28日	大鳥居	国重要文化財一ノ鳥居修理を実施す,	『社務日誌』

運びこんで進められたのであろう。そしてその後改修を重ね、14世紀の大路は現在と大差ない高さにまでなった。段葛はさらに一段高く造られていただろうから、これもまた現在高に近い位置と推定される。これでは地中に埋もれて埋蔵文化財として残ることもできないわけである。段葛も若宮大路も、現在に至るまで何度となく繰り返された改修工事によって、中世当時の姿を失ってしまった。しかし見方を変えれば、現在姿に近いともいえよう。」

「段葛」こそ14世紀以降の「詣往道」を忠実に踏襲したとし、14世紀には、現在と同じ高さの「段葛」が成立していたとする。このように、若宮大路に関する発掘調査は、断片的な箇所が明らかにされている程度に過ぎない。また、松尾が述べているように「段葛」自体が発掘されていないのである。

さらに、次項で詳述するが、中世においては土の掘削を忌み嫌う「犯土」という思想が存在しており、「段葛」の成立時期については慎重に検討しなければならないと思われる。

(3) 絵図にみられる「段葛」

松尾宣方は『よみがえる中世3-武士の都鎌倉』「段葛-大路の上のつくり道」¹⁷⁾のなかで、「段葛」について、絵図の描画や注釈から、その成立時期に迫っている。

表-4には、中世から近世において、若宮大路が描かれた絵図の一覧を示した^{18), 19)}。「段葛」が描かれた初出の絵図は、明応（1492～1501）年間の『善宝寺寺地図』であるという。そこには、石垣のような描画と「段葛」を表す「置石」という注釈がみられた。その後、近世初頭から江戸時代にかけて描かれた絵図には、石垣や若宮大路の中心部が一段高くなっている様子が描かれており、江戸時代までには、いわゆる「段葛」が成立していたとみられる（図-2）。

前項で示した先行研究には、14世紀（1301年～1400年）までに「段葛」が存在していたと示されていたが、絵図からは明確な成立時期は不明であった。

(4) 「犯土」思想との関連

筆者らは、わが国の10世紀をピークとして、9世紀か

表-4 中世から近世に描かれた絵図にみられる「段葛」

和暦	西暦	絵図名	描画	文字
明応年間	1492～1501	『善宝寺寺地図』	○	置石
天正19	1591	『鶴岡八幡宮天正の指図』	×	×
元禄16	1703	『相州鎌倉之図』	△	×
享保17	1732	『鶴岡八幡宮境内絵図』	○	×
明和頃?	1764～1771	『鎌倉名勝図』	×	段葛
天保5	1834	『鎌倉勝景図』	△	×
天保10	1839	『相中留恩記略』 「鎌倉郡之一鶴岡八幡宮」	○	×
嘉永3	1850	『鎌倉一覽之図』	○	×
嘉永3	1850	『本覚寺境内図』	○	壇葛
江戸末期	-	『鶴岡御神領往還并 谷々小道分間図』	×	だんかづら

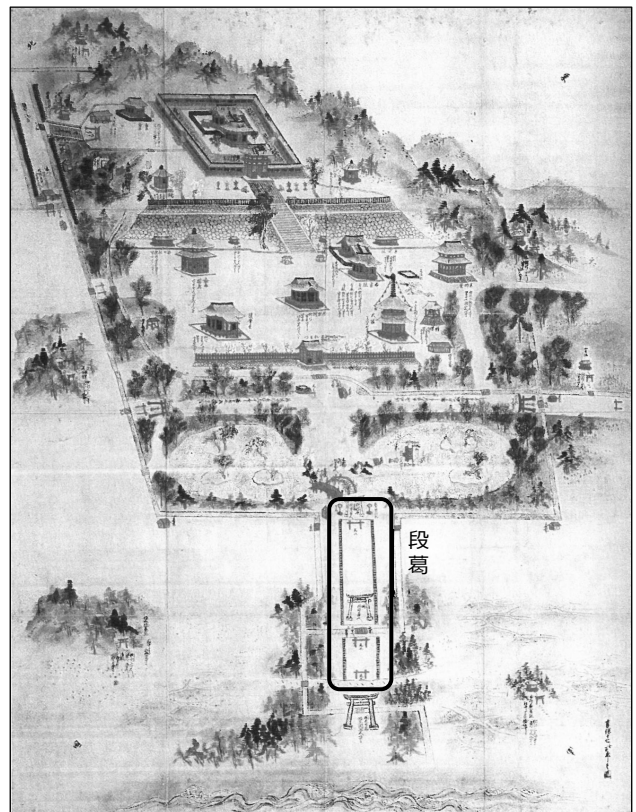


図-2 享保17（1732）年『鶴岡八幡宮境内絵図』²⁰⁾
（図中の「段葛」部分は西山が加筆）

ら11世の平安時代に「土木事業の空白期」が存在していたことを明らかにしてきた²¹⁾。先の空白期が生まれた一因として、平安貴族を中心に土の掘削を忌み嫌う「犯土」思想が存在していたとみられる²¹⁾。その影響によって同時代には社会基盤整備がほとんど実施されていなかったのである。

続く鎌倉時代においても、『吾妻鏡』に代表される一次史料には、「犯土」の記述がみられた。やはり、先の思想が影響して「土木事業の停滞期」が存在していたとみられる。しかし、柵の設置や堀の掘削などの軍事土木に加えて、道路整備や架橋といった社会基盤整備が表-1に示したように、ある程度実施されていた。貴族から武士へと支配構造が変化するなかで、土への恐怖は少しずつではあるが、払拭されていったのではないかと考えられる。

『吾妻鏡』の仁治2（1241）年4月5日の記述には²¹⁾、「新路を始めらるること、大犯土たるの間、明春三月以後に造らるべきの旨、重ねて治定すと云々。」とある。新しい道を整備する行為は、「犯土」であり、しかも「大犯土」であることが示されている。同年、10月22日の記事には²²⁾、「おのおの一同に申して云はく、堰溝・耕作・田畠の事は、土用方角の沙汰に及ばずといへども、この事においては、すでに始めての御沙汰たるか。大犯土といひつべきものか。」とあり、土を掘削する大規模な工事を「大犯土」と表現しているとみられる。代替の用語がなく、「犯土」を現在でいう土木工事の意として使われるようになっていたと推測される。今後は、その史実がほとんど明らかになっていない室町時代の土木史を明らかにすることが必要である。このような社会的背景も鑑み、「段葛」の整備時期を明らかにしていく必要がある。

(5) 「段葛」の名称

1章でも示したが、若宮大路の中央部、一段高くなった参道が「段葛」と呼ばれるようになったのは、一「段」高い位置に「葛」石を置いて整備したこと由来するといふ²³⁾。

しかしながら、いつ頃から「段葛」と呼ばれるようになったかは明確に示されていない。一方で、『春日社記録』『中臣祐定記』1232（寛喜4）年9月13日条には²⁴⁾、「壇カツラヲタタミ、壁石ヲ立」という記述があることから、「段葛」という熟語自体は、鎌倉時代から使用されていたのではないかとされる。

そして、図-3には鎌倉時代から江戸時代までの若宮大路と「段葛」の名称を示した。室町時代においては、先の「段葛」ではなく、「置路」や「置石」といった名称で呼ばれていた。そして、若宮大路自体が、千度小路と呼ばれていたことから、「千度壇」というように若宮大路の一部を表すような名称も存在した。「段葛」という用語自体は、鎌倉時代から存在していたと考えられるものの、若宮大路に存在する参道を「段葛」と呼ぶようになったのは、表-4に示した絵図の注釈からも近世以降であると考えられる。

4. 「段葛」の整備

(1) これまで行われた「段葛」の整備

若宮大路は、1182（養和2）年に建設されたとされる。3章では、現在までの約834年間で、「段葛」に関連する事項を『鶴岡八幡宮年表』²⁵⁾から抜き出し、表-2および表-3に示した。大鳥居の改修や立て替えの記述が目立ち、「段葛」に関する記述は限られる状況にあった。

表-3に示した『鶴岡八幡宮年表』²⁵⁾によると、大正7（1918）年と昭和4（1929）年に改修工事が行われており、今回の改修は、それ以来となる。

(2) 「段葛」のツツジを東日本大震災の被災地へ

3(3)では、土の掘削を忌み嫌う「犯土」思想が影響し、鎌倉時代には「土木事業の停滞期」が存在していたと考えられることを示した。

その一方で、叡尊（生没年：1201年～1290年）や忍性（生没年：1217年～1303年）といった僧が、架橋や道路造成などの社会基盤整備を実施していた。彼らは、社会福祉事業の一環として、囚人や困窮者等を組織して架橋や作道を行っていたのである²⁶⁾。

先の改修工事では、新たに植える桜を根付かせるため、既存のツツジを移植することとなった。「段葛」に植えられていたツツジ約1,600株が東日本大震災の被災地である岩手県、宮城県、福島県の3県（5市町、8ヶ所）へ寄贈された。このように、奉仕、扶助の精神は約800年の時を超えても、鎌倉の地で脈々と受け継がれていた。

5. まとめ

本稿では、平成26（2014）年11月1日から平成28（2016）年3月にかけて、大規模な整備・補修工事が実施された「段葛」に着目した。その整備工事、それ以後の観光資源としての評価を行っていく前に、「段葛」の基礎情報を得ることを目的として研究を進めた。

若 宮 大 路	段 葛
鎌倉時代	
詣往の道『吾妻鏡』 養和2（1182）年	
若宮大路『吾妻鏡』 文治元（1185）年	
中世の文書・記録には若宮小路と表記	
室町時代	
七度小路『鶴岡八幡宮社務職次第』	置石『殿中以下年中行事』 享徳3（1454）年
七度行路『快元僧都記』 天文3（1534）年	置石『喜宝寺寺地図』 明応年間（1492～1501）
	置石の道『鎌倉公方御社参次集』 永禄元（1558）年
千度小路『梅花無尽蔵』	置路『快元僧都記』
千度壇『梅花無尽蔵』 明応4（1495）年	
千度壇『鎌倉大日記』	
作道『鶴岡御造営日記』 天文13（1544）年	
江戸時代	
置路『新編鎌倉志』	貞享2（1685）年刊
置路『鎌倉紀行』	元禄4（1691）年刊
段葛『新編鎌倉志』	貞享2（1685）年刊
段葛『新編相模風土記』	
段葛『鎌倉名勝図』 明和？（1764～1771）年	
段葛『本覚寺境内図』 嘉永3（1850）年	

図-3 鎌倉時代以降の若宮大路と「段葛」の名称（作成：西山）

一次史料を整理していくと、「段葛」の記述は、養和2（1182）年に若宮大路が整備されて以降、明応4（1495）年まではみられない。併せて、発掘調査が行われてはいないものの、その成立年については、未だに明確な時期は確定されていない状態にあった。

そして、平安時代から続く土を忌み嫌う「犯土」思想が、鎌倉時代の武家政権へと移行するにつれ、薄れていったとみられるが、道路造成などの社会基盤整備に影響を与え、鎌倉時代には「土木事業の停滞期」が続いていたとみられる。そのことを考慮して、「段葛」の成立時期に迫っていく必要があることも示した。

このように、「段葛」が整備された年代、その名称になった明確な年代は未だ明らかになっていない。しかしながら、鶴岡八幡宮の参道は、多くの参拝客や観光客が行き交い、活気に包まれている。また、わが国には海から寺社へ向けて一直線で伸びる参道は、「段葛」以外に存在するのであろうか。それは、唯一無二の存在であるともいえる。やはり、古都鎌倉には欠かせない観光資源の一つであることには変わりない。

「段葛」の修復工事が実施され、古都鎌倉の観光、周辺のまちづくりへとどのような影響をもたらしたかを今後明らかにしていきたい。

参考文献

- 1) 白井永二：段葛考，pp.1-8，鎌倉文化研究会，1963.
- 2) 鎌倉市史編纂委員会：『鎌倉市史 総説編』，pp.258-263，吉川弘文館，1959.
- 3) 石井進編：『よみがえる中世3-武士の都鎌倉』，pp.72-74，平凡社，1989.
- 4) 前掲1)

- 5) 前掲3)，pp.72-74.
- 6) 下中邦彦：『日本歴史地名大系第14巻 神奈川県 of 歴史』，p.270，平凡社，1984.
- 7) 鎌倉市教育委員会：『史跡鶴岡八幡宮境内保存管理計画書』，28p，社会教育部文化財保護課，1988.
- 8) 鎌倉市教育委員会：『史跡若宮大路保存管理計画策定報告書』，65p，鎌倉市教育委員会，2006.
- 9) 前掲6)
- 10) 西山孝樹・藤田龍之：鎌倉時代における土木事業と関連する官職について，pp.91-98，土木史研究講演集，Vol.35，2015.
- 11) 頼朝会：『鎌倉大日記』，P.32，頼朝会，1937.
- 12) 鶴岡八幡宮：『鶴岡八幡宮年表』，619p，鶴岡八幡宮社務所，1996.
- 13) 前掲6)
- 14) 前掲3)，pp.75-78.
- 15) 前掲10)
- 16) 前掲12)
- 17) 前掲3)，pp.75-78.
- 18) 前掲7)
- 19) 前掲8)，pp.14-18.
- 20) 前掲8)，p.16.
- 21) 西山孝樹・藤田龍之・知野泰明：わが国の平安時代における「土木事業の空白期」に関する研究，土木学会論文集 D2（土木史），Vol.68(1)，pp.123-131，2012.
- 22) 前掲10)，p.3.
- 23) 前掲1)，p.4.
- 24) 前掲1)，p.5.
- 25) 前掲12)
- 26) 西山孝樹・藤田龍之・知野泰明：我が国の古代の僧が持ち合わせていた仏教思想と彼等による土木事業について，pp.273-27，土木史研究講演集，Vol.31，2011.

(2016. 4. 11 受付)